

FDニュース

発行日 2011年 6月 9日

目次 :

LESSON SHARE	1
国際グッドプラクティス	2
FD報告	3
FDニュース後記	4



ーシラバスー

Japan Studies II (比較文化・比較文学)

開講区分: 前期 火・木1時限

- 第1回: Introduction
- 第2~7回: Foreign Authors Who Contributed to the Introduction of "Japan" to the World: Lafcadio Hearn: Why he came to Japan, "My First Day in the Orient", "From the Diary of an English Teacher", and Other essays
- 第8回: Lafcadio Hearn and Natsume Soseki
- 第9~10回: Basil Hall Chamberlain: Several Essays from "Things Japanese"
- 第11回: Basil Hall Chamberlain and Lafcadio Hearn
- 第12回: Review (1)
- 第13~15回: A. B. Mirford(1): "Forty-Seven Ronins"
- 第16回: Edward S. Morse: His Life and Works
- 第17回: Isabella Bird: Her Life and Works
- 第18回: Alice Bacon: Her Life and Works
- 第19回: Review (2)
- 第20~21回: Japanese Authors Who Contributed to the Introduction of "Japan" to the World: Okakura Tenshin: His Life and Works
- 第22~23回: Okakura Tenhin and Earnest Fenollosa
- 第24回 Japanese Christians Who Introduced "Japan" to the World
- 第25~27回: Nitobe Inazo(1): "Bushido"
- 第28回: Uchimura Kanzo: His Life and Works
- 第29回: Tamura Naomi: His Life and Works
- 第30回: Review (3)

1. LESSON SHARE

「LESSON SHARE」では、日本大学国際関係学部・短期大学部で行われている特色ある授業実践を紹介しします。各授業においては、様々な取り組みがなされており、そうした実践を共有することで、それぞれの授業を振り返り、より豊かな授業が行うヒントになればと思います。

(インタビュアー: 長嶺宏作)



今回は梅本順子教授の「Japan Studies II (比較文化・比較文学)」(第8回目:ラフガディオ・ハーンと夏目漱石の関係性)の授業にお邪魔しました。このクラスは英語で行われる授業であり、ISEPからの留学生1人、ストーニーブルックからの留学生1人、社会人聴講生1人、そして、学部生が26人受講しています。

授業は東京帝国大学教員時代の漱石の授業を学生がボイコットしたエピソードによって、漱石が前任者であったハーンを強く意識していたという話から始め、ハーンと漱石(ハーンから着想を得て)がともに描いた「子殺し」の怪談物を読み比べることで両者の類似性と相違について理解する授業でした。時折、留学生には物語の中のでてくる日本文化や慣習について説明して、他の学生もともに興味深く聞いていました。

長嶺: この授業は英語での授業ですが、どのような点を工夫されていますか？

梅本: 留学生と学部生の両方が理解できるように苦労しています。例えば、今回はハーンと漱石の物語ですが日本語訳も渡していますし、授業の合間に日本語で説明を入れています。ただ出来るだけ原書のテキストを渡して、全文和訳をしないで学生に考えさせるようにしています。学生も意味のわからないところを質問に来たり、和訳があっているのかをコメントシートに書いてくれるので、その都度、個別に説明をしています。また、授業では、ハーンが赴任した熊本第五後期中等学校(現熊本大学)の写真を見せて意味を理解させています。しかし、留学生の理解と学部生の理解の差だけでなく、学習意欲の高い社会人の方もいるので、それぞれのレベルの差には苦労しています。

長嶺: 授業の最後にコメントシートはどのように活用しているのですか？

梅本: 学部生の理解が確認できないのでコメントを書いてもらって、次回の授業で、そのコメントに対応した授業を行うようにしています。

長嶺: レポートも5月の時点ですでに3回出されていると聞きましたが？

梅本: レポートは、学期の終わりまでには大体6回ぐらい出しています。それぞれ英文のテキストを英語で要約させています。また、レポートは必ず返却して、場合によって学生には書き直しをさせています。資料を丸写したのなどは元の資料を添付して渡すと、謝ってレポートを書きなおしたりしてくれますよ。ただ学生の興味や能力も異なるので、例えば留学生には別の課題を与えるなど、それぞれ能力にあわせて対応しています。

前年度は留学生が10人以上いて、留学生2人に対して学部生3人からなる5人ぐらいのグループを組ませてディスカッションが出来たのですが、今年は2人です。講義が中心となってしまいます。それぞれの年度の学生の様子を見て、授業の方法も柔軟に変えています。

長嶺: 今日は、お忙しいところ、ありがとうございました。



2. 国際グッドプラクティス：

スタディスキルズのスキルズ

「国際グッドプラクティス」では、学部と短大に共通する授業や課題を特集して、各教員の取り組みを紹介します。第1回は、国際総合政策学科・国際教養学科で行われている「スタディ・スキルズ」に焦点をあてました。これまでも国際交流学科、国

際ビジネス情報学科、また、短期大学の商経学科でも行われてきたので、その経験を活かした3人の先生方（青木千賀子教授、蓼沼智行助教、白瀬朋仙教授）の取り組みを紹介したいと思います。

① 入学間もない新生の“相談場所”を作ること：青木千賀子教授

安元：「スタディ・スキルズ」の授業で心がけている点は何ですか？

青木：新生は、高校生から大学生となりましたがまだ大学についてよくわからず、不安をたくさん抱えています。そんな学生たちに「相談できる場所がある」ということを**まず知らせたい**。週1回少人数で決まった仲間たちと顔を合わせて勉強することは、ゼミが始まっていない1年生には貴重な時間です。他の授業とは違い、少しホッとできる場所を作り、帰属する場所があることを実感させることで、友人がいない、または相談する人がいない学生をケアすることができると考えています。

安元：クラス作りのために具体的にはどんな工夫をされていますか？

青木：まず、**全員の名前を覚え**ます。一対一の個として向き合うための基本です。そして、**メールアドレスを登録し、連絡事項を一斉配信したり、学生からの相談にすぐに対応**できるようにしています。相談内容は履修の関係がほとんどですが、進路、健康のことなどもあります。内容によってはオフィスアワーも利用しています。

安元：学生のスタディ・スキルズを高めるために、授業内容で工夫していることは何ですか？

青木：テキストが指定されているので、それに基づき進めています。テキストを講義するだけでは学生はついてきません。まずは実際に付属のワークシートを中心にワークさせること。そして、**必ず添削し、次週返却**することを心がけています。また書写の作業など、「高校までにやってきたことをいまさら」と斜に構える学生もいますが、実際に声に出して読ませたり書かせたりすると、漢字が読めない書けない、語彙が少ないなど、問題点が多く、「**自分はまだ未熟な存在**」と認識させることができます。その点を認識した学生は、その後、さまざまな課題にまじめに取り組んでいるように思われます。授業を通して「教育力」の問題が突きつけられ、悩みつつ、努力しています。

安元：学生に興味を持たせるために、どのような教材を使用していますか？

青木：テキスト付属のDVDには要点がまとめてあるので、これを見せながら授業をすることで平板になりがちな**授業に変化**をつけています。

また、シラバスの予定内容のほかに、国際関係学部生として知っておいてほしいと思う新聞記事などを配り、みんなで読み、考え、感想を書かせたりします。たとえば「マイノリティ」の問題など。これは私の研究テーマでもあるのですが、やはり担当教員が面白く感じなければそれを聞いている学生がおもしろい、と感じるはずがありません。**教員自身が「おもしろい」と感じる内容を取り入れる**ことが大切だと思います。

【インタビューを終えて】

青木先生の「スタディ・スキルズ」のコンセプトは、授業を通して一つのコミュニティを作り、まず、新生が安心して大学に通学できる環境を作ること、である。そのために学生との心のキャッチボールを非常に大切にされていることがよくわかった。「大学一年生の前期で大学生活のその後が決まる」とは日大本部のFD委員の言葉であったが、その時期、「スタディ・スキルズ」が果たす役割は想像以上に大きいかもしれない。文字通りのスタディ・スキルズ向上だけでなく、青木先生のように「新生の心の拠り所」を形成することが学生の大学生活への意欲を高め、ひいては退学者の減少にもつながってゆくにちがいない。

(インタビューアール・安元隆子)

② プレゼン能力を育成：蓼沼智行助教

鄭：早速なのですが、90分の授業時間をどのように展開されていますか？

蓼沼：講義の前半はホームルームのような時間の使い方をしていきます。学科行事等の伝達事項を告知したり、**学生一人一人とのコミュニケーション**をとりながら大学生活面でのサポートを行ったりしています。また、講義の後半では講義計画に即して文章能力や調査・研究能力を開花させるためのきめ細かな指導を行っています。

鄭：授業計画にはリーディング、アカデミックライティング、プレゼンテーションの基本スキル等がありますが、特に力を入れて指導なさっているところはどこでしょうか？

蓼沼：プレゼンテーションの基本スキルですかね。様々な講義を計画的に学び知識を習得し、それを自分自身で吟味し、問題解決に繋げることのできる能力は、現在、多くの企業・組織社会からは求められています。しかし、せつかくそうした能力があってもそれを**相手に伝える技術**がなくてはもったいないと思います。プレゼンテーションを通じて自分のアイデア・発想を相手に説得する能力を習得したり、説得するプロセスにおいて創意工夫をすることでより知識の向上を図ることもできます。

鄭：グループ研究の発表について伺いたいのですが。

蓼沼：国際ビジネス情報学科のスタディ・スキルズ時代よりグループ研究の発表には力を注ぎま



した。グループで共同作業を行うこと、すなわち、**自分以外の人と一緒に意見を交わしながら研究をすることは協調性とリーダーシップを習得するのに最適**です。私のクラスではクジ引きでグループ分けを行い、その中で国際関係、国際協力、国際ビジネスのいずれかの分野、または融合させて各々が研究しています。知識の定着を図ると同時に**如何にお互いの意見を矛盾なく体系化し、第三者に伝えるか**といったことを積極的に学んでいます。

鄭：最後の質問ですが、クラスの学生達を仲良くさせる方法は何かありますでしょうか？

蓼沼：グループでの共同作業を行ったりあるいはグループでの討論を行うことで自然とコミュニケーションが増え、**気が付けば仲良くなっているような気**がします。また、前期後半にはグループでの発表会を行う予定です。その頃には仲間意識がより高まっているように思います。

(インタビュアー・鄭勳燮)



③ 個別指導の徹底：白瀬朋仙教授

長嶺：商経学科での「スタディ・スキルズ」の取り組みは、どういったものでしょうか？

白瀬：商経学科の「スタディ・スキルズ」は、「**基本的・実践的思考と技術の習得**」をテーマに、新聞を含む各種メディアや文献の講読、フィールドワークの実践のほか、指定教科書の講義を通して短期大学において必要な学習技能(読み書き、調査法、発表)の習得を目指す内容となっています。また、商経学科の特徴として編入学をめざす学生が県外から多数入学していることから、これから2年間過ごす地元のことを理解するために、フィールドワークでは**三島の歴史、文化、経済の観点からテーマを与え、発表を通して全員で知識を共有**することも副次的な目的としています。

長嶺：「スタディ・スキルズ」では他にも、様々な取り組みを行っていると聞きましたが？

白瀬：商経学科卒業後の進路としておよそ半数が編入学、半数が就職という状況にあり、同じ新生生であってもこれまでの学習経験やこれからの学習に対するモチベーションにかなりの違いが生じています。そこで**同質な集団を形成することで教育の効果をあげる**ことを目論み、入学時に提出された短大卒業後の進路についての作文をもとにクラス分けを行っています。

また、1名の外国人を除く専任教員全員で担当し、現在のところ1クラス当りの**学生数は12~16名**となっています。個別指導が必要な内容であることを考えると若干多い人数と言わざるをえないが、今年度からは**専用のノートを用意し、授業時間内で指導しきれない部分を補うための工夫**を試みています。また、教員の能力の違いにより学習成果に差がないように、シラバスだけでなく毎回の授業に使用する教材も統一するとともに、**取りまとめ役の教員が各クラスの進捗状況を毎回把握し、必要と判断した場合には、適宜調整**を図ることで学生の学習成果のバラツキを最小限にとどめています。

(インタビュアー・長嶺宏作)

3.FD報告：平成22年度後期授業アンケートの結果について

H22年度(後期)の授業アンケートの実施率は、国際関係学部・短期大学部併せて85%で、前期の67%と比較して格段に向上しました。先生方のFDに対するご理解とご協力のおかげと考えます。なお、各科目群毎の平均値については、Black Board(学内のみ)で閲覧が可能です。また、H23年度分からはFDニュースに掲載予定です。

国際関係学部、H22年度後期の授業評価アンケートの全体平均は4.3でした。継年度の変化をみると、H21年度前期が4.1、後期が4.2、H22年度前期が4.2と変化しており、上昇傾向を示していると言えます。一般的に、必修科目で大人教授業を行っている科目は平均値が下がる傾向が指摘されています。本学部でも、学部共通専門科目は他の科目群と比較すると平均値が若干低いという継続的な傾向が認められます。一方、その他の学部専門科目、語学科目、教職科目、保健体育科目では全体平均と比較して、同じ、あるいは高い結果を示しています。必修科目で大人教授業であっても、授業評価の高い授業もあります。そうした授業においてどのような取り組みがなされているのかをFD委員会としてとりあげ、先生方に紹介し、授業の参考にしていただければ、と考えています。

短期大学部のH22年度後期の授業アンケートの全体平均は4.1でした。継年度の変化をみると、H21年度の前期が3.9、後期が4.1、H22年度の前期が4.0と変化しています。前期より後期の方が、平均値が上昇する傾向が顕著です。また、国際関係学部と同様に、必修科目で大人教授業を行っている科目は他の科目群と比較して平均値が低くなる傾向があります。そして、総合教育科目が他の科目群と比較して平均値が若干低くなる傾向が認められます。この点に対し、短期大学部でも総合教育科目の必修指定を外す、科目数を増やすなどの対応を行っており、徐々に授業評価の数値が上昇してきています。

授業評価アンケートの具体的な結果がどのように学生の授業理解度や満足度に影響するのか、つまり、授業実践の実際と学生の授業評価の関係性の有無については簡単には結びつけられないので、解釈は慎重にする必要があります。しかし、本学部の授業アンケート結果だけではなく、日本大学本部が3年に一度行っている「学生生活実態調査」の「授業満足度の学部間差異」の調査結果も勘案する必要があります。前回(21年度)の調査結果では、国際関係学部は「教員の教え方」で15位(17学部中)など、他学部と比較した場合、授業やカリキュラム、教員の対応等において、全体的に学生の評価が低い傾向があります。もちろん、この結果が何を要因としているのかは明確ではありませんが、より一層の学生への「教育力」の充実が求められています。

FD委員会では授業改善を目的とした授業アンケートの活用が議論されており、授業アンケートの効果的な活用事例などがありましたら、ご教示、ご提案をお願いいたします。また、今後は、学務委員会、自己点検委員会などと協力して学部全体としての組織的な取り組みを進めていく必要があると考えています。

(文責・安元隆子・長嶺宏作)

FDニュース後記

今回、FDニュース発行にあたり、快くインタビューを受けていただいた諸先生方に感謝申し上げます。FD委員会では、授業改善を目的とした教員の啓発活動を活性化させるために、「FDニュース」という形での情報提供の機会を設定いたしました。FD活動は、どうしても授業評価が先行してしまい、本来の目的である授業改善が等閑にされてしまう場合があります。そうしたことのないように、各教員の地道な教育努力をすくいあげ、それを共有化することで、大学の教育力の改善に寄与できればと思います。

しかしながら、教育学の世界において昔から「分かる授業」と「楽しい授業」論争というのがあり、何が良い授業かは答えが出ていません。単純化すると、「分かる授業」とは授業の目的は授業内容の理解であり、「楽しい授業」とは学習者の主体的な興味と関心を持たせることが授業の目的であるというものです。「楽しい授業」の立場に立てば、英語が理解できても英語嫌いの生徒を作るような授業は全く本末転倒ではないかと考え、つまり、学習内容への関心が真の学習の理解につながるという主張です。「分かる授業」とは、「楽しい授業」はただ興味関心を持たせるだけで肝心の学習内容の理解が達成しない授業だと批判し、真の学習内容の理解は学習の喜びをもたらすはずだと主張します。結局のところ、「楽しくて分かる授業」を目指すべきなのですが、このことは言うのは簡単なものの、行うのは中々の努力がいります。

大学の教員は、いずれもその道のプロフェッショナルであるがゆえに、授業の理解と興味において学生とのギャップの間に呆然としているのが現実でしょう。しかし、逆に学生からすれば、教員とのギャップに呆然としているのかもしれない。先日、私も学生から「先生は、いつも何を考えて生きているんですか？」と言われて、絶句したばかりです。

(文責・長嶺宏作)

FD委員会

発行者：日本大学国際関係学部
FD委員会

FD委員長：安元隆子

FDニュース小委員会：

長嶺宏作・鄭勳燮・白瀬朋仙・太田尚子

2011年6月9日発行